

構えについて [川島次郎記録帳]

五方の構え——五行の構え

- ・ 上段 中段 下段 [三段の構え]
- ・ 上 中 下 陰 陽 [五行の構え]

中段の構えは剣道定石の構えである

				全剣連居合	
・ 上段	————	天の位	———— [火]	———— 攻撃の構え	7本目 10本目
・ 中段 (正眼)	—	地の位	———— [土]	———— 攻防の構え	6本目
・ 下段	————	人の位	———— [水]	———— 防衛の構え	
・ 八相	————	木の位	———— [陰]	———— 監視の構え	5本目
・ 脇構	————	金の位	———— [陽]	———— 監視の構え	10本目

* どの構えが有利か不利かと言うことは無い。火は水に消され、水は土に消され、土は火に焼かれる。

上段の構え

- ・ 我刀敵に達する距離近い
- ・ 敵を頭より見下し、見通しよし
- ・ 引けば突き入り、押して行く
- ・ 刀を振り上げる事を要せず
- ・ 起こりを押さえ、出る端を打つ
- ・ 何ものも焼き尽くさねば止まらぬ意気
少しでも気が弛むと敵に突き入られる

中段の構え

- ・ 剣尖を両眼の中心につける (全剣居6喉)
- ・ 如何なる動作を起こすにも
- ・ 如何なる攻撃に应ずるにも
- ・ 攻むるに逸^{はぶ}らず、守るに固まらず、心を八方に配る

下段の構え

- ・ 剣尖を敵の膝下二寸に付ける
- ・ 我より進み打たんとするに非ず
- ・ 刀を低く持ち、心低くして敵を恐れず
- ・ 自由に変化し、応接するなり
- ・ 水の如く流動、淀みなき心を以って敵に
- ・ 敵の足元を脅かし進撃を防ぐ
- ・ 守を堅くし、敵の動静を監視する

八双の構え

- ・ 剣を立木の如く立て、心も大木の如く
- ・ 泰然自若として敵の動作を監視
- ・ 敵の挙動により如何様にも変化する

脇 構え

- ・ 打ちを發するに大冠りに打ち込む
- ・ 或いは揚袈裟胴に打ち込む
- ・ 監視の構えにて八双に同じ

心の構えに重きを置くべし

- ・ 形の構えは、城で申せば石垣・砲台
- ・ 如何に要害が堅固で、良将が居ても虚実変化の妙用を施さずば
- ・ 形、立派にても心非らざれば将卒居らぬに等し
- ・ 敵の蹂躪じゅうりんに委ねる他なし

構えの目的

- ・ 敵を斃たおすのであって、守るによく、攻めるに敵を斃さねば止まぬよい体勢
- ・ 烈々たる闘志心の内に充滿している事

構えの目付

- ・ 敵の顔面を中心に、身体全体を見る
- ・ 心持ちは遠山を望むが如く
- ・ 一つは劍尖、一つは拳
- ・ 敵が自分より未熟な場合は、敵の目を見ることも有る
- ・ 帯の辺りを見て駆け引きする事も有る
- ・ 五輪の書 「観」は心で見ると 「見」は眼で見ると
- ・ 部分的に見ず、肉眼で見ず、心眼で観ると
- ・ 一刀流伝書 裏より勝つには表に目をつけ、敵は表を囲い裏は虚となるなり

居合の形にも多くの構えあり、構えの持つ意味をよく理解して

演武しましょう